情報教育

「自ら」学びに向かう子どもの育成
～『情報活用能力ベーシック』を基にした学習プロセスと ICT の効果的な活用について～

新潟市立金津小学校　　武藤　奎太
（令和元年度・平和の会）

主体的に学習方法や学習環境を計画・選択し、自己評価や振り返りから、学びを次につなげる、「自ら」学びに向かう子どもを育成するために、まず、JAPET 提唱の「情報活用能力ベーシック」を基とする「5 つの学習プロセス」（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現、振り返り・改善）を導入した第 3 学年算数科の実践を行った。しかし、第 3 学年の実践では、学習者自身が本時の課題を把握しきれず、自分に合った学び方を選択できなかったり、学びを言語化する姿までは至らなかったりした。そこで、「５つの学習プロセス」のサイクルはそのままに、それぞれのプロセスにおける≪①教師の適切な役割や介入度、②更なる ICT 活用による有効的な手立ての開発、③個別支援のための学びの足跡（思考の可視化）の共有≫等、第 3 学年での実践の成果と課題を大胆に見直し、教師の手立てを修正しながら、今年度、第 6 学年算数科「小数と分数の計算」を実践した。

そのため、本発表では、第 6 学年の実践における『(手立ての修正による』主体的な学びの姿の出現と変容』を中心に述べる。①各学習プロセスでの姿では、「課題の設定」において、全体での課題把握を行った。見通しが持てない児童にアドバイスをする姿があった。「情報の整理・分析」において、計算過程だけでなく、算数の見方・考え方を働かせて、自分の考えを整理していた。「まとめ・表現」において、学級全体で学びを共有することができた。②単元を通しての姿では、児童Ａは、一人での活動の取り組みから友達との協働的な学びへと学習形態が転移し、児童Ｂは、情報の整理方法や情報の収集方法に課題意識をもち、単元内において、改善していく姿があった。

これらのことから、主体的に学びに向かう子どもの育成には、①「課題の設定」で、見通しが持てない児童にアドバイスをする姿があったり、「まとめ・表現」で、学級全体で学びを共有することができたりしたことから、適切な教師の介入のもと、共通の学習課題・学習のゴールをもっていたことが有効であったと考えられ、「情報の整理・分析」で、算数の見方・考え方を働かせて、自分の考えを整理していたことから、「どのように」計算するのかという目的意識をもち、複数の手段（アナログ・デジタル）を持たせたことが有効だったと考えられる。②児童Ａ・Ｂの学びの変容について、学習プロセスで繰り返し取り組み、定着していったことが、学習方法や環境を主体的に調節する姿につながったと考えられる。適切な教師の介入・ICT 活用を取り入れた５つの学習プロセスやその学習プロセスを定着させることは有効であることが示唆された。